

RC-17 「サポート拠点の効果的な整備及び運営について」

課題提案者：大槌町福祉課、研究代表者：社会福祉学部 教授 狩野徹
研究メンバー：関谷辰也（大槌町）

<要旨>

本研究では、仮設住宅地に建設されたサポートセンターの効果的な整備や運営方法について、提案から実際の使われ方、運営上の課題などを整理しながら提言していくものである。仮設住宅地に設置されるサポートセンターはほとんどの場合、仮設住宅の計画時に同時に計画され、岩手県の場合はデイサービスの空間と入浴、排泄、多目的室等の構成で提案されている。県下のサポートセンター建設計画時に水回りの提案等関わる事ができた経験を活かし、仮設住宅建設後に追加として建設されるサポートセンターの提案・整備のプロセス、実際の使われ方などの運営状況からサポートセンターのあり方を提案する。

1 研究の概要（背景・目的等）

大槌町において、平成24年度に新たにサポート拠点を2カ所整備する予定で、サポート拠点の建設から運営までの進め方についてのノウハウが無い状態でどのようにしたら効果的に進めることができるか課題になっている。予定しているサポート拠点の1つはグループホーム型仮設住宅と一体的運営を予定している小規模のものである。もう1つは一般の町民を対象としてサポート拠点で、従来町内にあった入浴施設が震災後、事業再開を断念したこと、仮設住宅の浴室が面積の点などで課題が多いことなどから、入浴施設を中心とした健康管理・指導が行えるサポート拠点とする計画である。どちらも前例のないタイプで、サポート拠点の基本的な計画・設計には専門的知識が必要になる。さらに、今後の復興を見据えたサポートセンターの運営の方法について、評価することも必要である。

そこで、本研究の目的は以下の3点とする。

- 1) サポート拠点の具体的計画・設計提案を行う。
- 2) サポート拠点の実際の使い方を観察等から把握し運営、評価する。
- 3) 復興段階に合わせて新たなサポート拠点の在り方の提言を行う。

2 研究の内容（方法・経過等）

1) サポート拠点の具体的計画・設計提案

2つの新サポート拠点の建築的計画案について基本設計の元になるプランの提案を行う。

2) サポート拠点の運営、評価

計画・設計意図を踏まえ、実際の運営が始まるが、サポート拠点の運営事業者とよりよいサポート機能を発揮するための方策を、定期的に利用状況を調査し、評価を継続して行い、内容の見直しを検討していく。

3) 復興段階に合わせて新たなサポート拠点の在り方の提言

今回提案するサポート拠点は、仮設住宅中心のもの

ではなく、復興時にも何らかの形で継続できるものを予定している。復興へ向けての移行期に生じる課題を整理し、復興後のまちの中での福祉的サポート拠点、医療や一般生活支援などとの連携のできる体制の在り方を提案する。復興の段階に合わせて、町民への情報提供や住民同士の交流の場となるような新しい形のサポート拠点の在り方を提言する。なお、入浴施設を中心としたサポートセンターはプランの提案を行ったが、事業そのものが凍結になったので、提案したところまでの研究となる。

3 これまで得られた研究の成果

1) サポート拠点の具体的計画・設計提案

サポートセンターの提案を図-1のように行った。提案の条件としては、①全体として100m²程度に、②福祉型仮設住宅（グループホーム型仮設住宅）と一体感を持たせるために奥行き（図面上縦方向）の寸法をそろえ、出入り口も連携させる。③キッチンについては食事サービスは前提としないので大規模でなくて良い。④浴室はグループホーム型仮設住宅を利用するので不要。⑤ボランティアや関係者が宿泊できるような配慮をする。といった項目であった。

実際の提案は以上の条件をすべて満たし、デイルームと和室、多目的室が一体的に利用することや一時的に別室として使い、宿泊や小グループで利用できるように配慮した。トイレの配置は、サポートの必要な高齢者を対象とするので、広い車いす対応のトイレももうけた。また、これまでに建てられたサポートセンターの多くはいわゆる「プレハブ型」で床面の断熱等に課題があったので、従来工法で建設することとなった。

2) サポート拠点の運営、評価

実際の開所が平成25年の1月になったので、詳細な観察調査等は25年度に延期したが、定期的に利用状況を観察等している。

(1) 提案がうまくいっている使われ方

- ① 実際の利用人数が20名程度であり、岩手県のサポートセンターのほとんどを占めている300m²のサポートセンターに比べ家庭的スケールで使われている。デイルームの広さも適切であったと思われる。
- ② 多目的室は戸を閉めればデイルームとは別の目的で使用しても違和感がない。みんなで一緒に行うサロンの活動より、1人や2、3人の特定の利用者で個人的な利用も見られる。特に、マッサージ器を置いたこともあり、マッサージ器利用だけの利用者もいる。ボランティアの学生たちが来たときに宿泊もされた。
- ③ グループホーム型仮設住宅との一体感は、ほとんど意識しないで行き来できる状況であるため、グループホーム型仮設住宅の利用者もほとんど毎日こちらのサポートセンターに来ている。このため、仮設住宅にいるサポートの必要な人（比較的軽いサポート）とグループホーム型仮設住宅でサポートされている利用者（食事や見守りなど）の交流もできている。

(2) 課題と思われる使われ方

- ① 介護事業を行っているわけではないが、入浴のサポートもできたら良いのでは、と職員は感じている。この点については従来の一一般のサポートセンターの浴室、集会場の浴室の問題と共通で、仮設住宅に設置されている浴室が必ずしも使いやすい物になって

いないことの影響がある。また、宿泊ができるような配慮をしているが、浴室は隣のグループホーム型仮設住宅の浴室を利用することになり、時間帯によっては利用者に迷惑がかかる。

② キッチンの広さ

日常的なサポート時では問題ないが、ボランティアなどが集まるときに利用者20名、ボランティア10名、合計30名以上になると、食事の準備が大変になる。

3) 復興段階に合わせて新たなサポート拠点の在り方の提言

現在のところ明らかになっている点であるが、この100m²程度の小規模なサポートセンターであっても十分機能することがわかり、また、グループホーム型仮設住宅との連携も考えると、かなり活用ができることがうかがわれた。まだ質的な分析にとどまっているのでさらに詳細な調査で検証していきたい。

4 今後の具体的な展開

開所が予定より遅れたため、引き続きサポートセンターの利用状況等の調査を続け、サポートセンターのあり方について提言していく。なお、これらの経過を踏まえ、学会での発表等において、サポートセンターを含めた仮設住宅地の計画論を提言していく予定である。

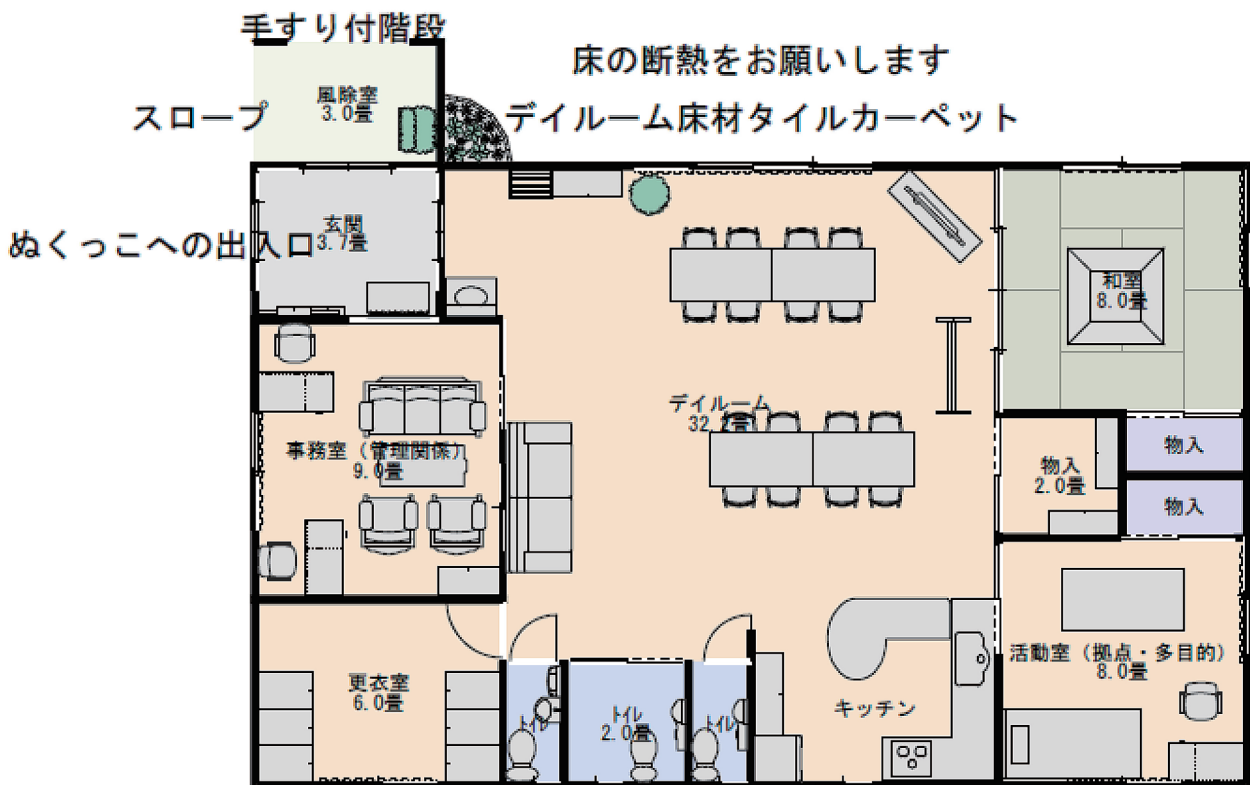


図-1 サポートセンター平面図